

# *The Liberal Imagination*の政治学

齋藤博次

## (1)

*The Liberal Imagination*はLionel Trillingが1942年から1949年にかけて書いた批評を集成した評論集であり、トリリングが文芸批評家としての地位を築く礎になった書である。そこには、Kinsey Reportを論じたもの（“The Kinsey Report”）からFreud論（“Freud and Literature”と“Art and Neurosis”）、さらには英米の古典的作品（たとえば*The Princess Casamassima*や*The Adventures of Huckleberry Finn*など）を論じた作品論など、当時のトリリングの関心の大きさを窺わせる多様な批評が収められている。他のニューヨーク知識人がそうであったように、トリリングもまた、自己の知的活動を狭い意味での文芸批評に閉じ込めない関心の広さを持っていた。しかし、その一方で、トリリングは*The Liberal Imagination*には「ある種の統一性」(a certain unity)があると述べている。彼によれば、その「統一性」は、“an abiding interest in the ideas of what we loosely call liberalism, especially the relation of these ideas to literature”に起因するという（“Preface”）。「リベラリズム思想と文学との係わり合い」という問題意識が、一見したところ多彩に見えるこの評論集を貫く横棒になっている。

だが、*The Liberal Imagination*をその出版年、すなわち1950年という歴史の時間の中に置いてみると、「リベラリズム思想と文学との係わり合い」というテーマ自体が、幾つかの疑問を誘発させる。そもそも、何故、「リベラリズム思想」だけが「文学」の対抗軸として選ばれているのか。また、「リベラリズム」という言葉をトリリングはどのような意味で使っているのか。さらにまた、トリリングが自らのテーマに対して出した答えを、この論文集

のもうひとつのテーマである「政治と文学」との係わり合いという観点から眺めた場合、*The Liberal Imagination*はどのような政治性を孕んでいるのだろうか。本論は、こうした疑問を視野に入れながら *The Liberal Imagination* を読み解くことで、この評論集が孕む批評原理の政治性を暴く試みである。

## (2)

1980年代にPC (Political Correctness) 問題がアメリカの大学の内外を騒がせたとき、feminism, multiculturalism, postcolonialism, deconstructionといった、新しい「知」の動きに脅威を覚えた保守的な人文系の研究者やジャーナリストは、実際は差異と対立を孕んでいた多様な思想運動の担い手をPC (Political Correctness) というひとつの言葉で命名して批判を加えた。PC派とは、60年代の大学運動を担った左翼の末裔であり、多様な意見を封殺する「不寛容」の輩であり、自由を抑圧する「全体主義者」である。そして、このPC派が大学の運営と教育を支配している——これが、PCと名づけられた人たちを批判する際の常套的なレトリックであった (齋藤 184-87)。

この種の批判に見られるのは、〈敵〉を攻撃する際に使用される一連の修辞学の使用である。攻撃する対象の内部に本来存在する差異を消去して、〈敵〉を一つの単純なイメージで表象すること。自らが劣勢の立場にいることを過度に強調し、〈敵〉の脅威をことさら力説すること。もともと存在していたPCという記号 (シニフィアン) に別の意味 (シニフィエ) を与えて、言葉の中身を脱構築すること。さらにこれに加え、PC派を攻撃する言説には、冷戦時代から延々と続いてきた修辞学、つまり、〈敵〉を「全体主義」という名で攻撃し、自らを「自由」の名のもとに弁護するというレトリックを見て取ることができる。「トルーマン・ドクトリン」の系譜に連なるレトリックである。<sup>1</sup>

トリリングは *The Liberal Imagination* の中でリベラリズム思想への批判を繰り返し語っている。その批判の中身については後で述べるが、その前に、この評論集が、出版当時における「リベラリズム」の優越性を強調する言葉

から始まっていることを確認しておこう。

In the United States at this time liberalism is not only the dominant but even the sole intellectual tradition. For it is the plain fact that nowadays there are no conservative or reactionary ideas in general circulation. This does not mean, of course, that there is no impulse to conservatism or to reaction. Such impulses are certainly very strong, perhaps even stronger than most of us know. But the conservative impulse and the reactionary impulse do not, with some isolated and some ecclesiastical expressions, express themselves in ideas but only in action or in irritable mental gestures which seek to resemble ideas. ("Preface")

この引用が含まれている *The Liberal Imagination* の「序文」には、1949年12月の日付が付されている。McCarthyが国務省の共産主義者の名簿を持っていると発表したのが1950年2月であるから、この「序文」は、マッカーシーイズムが始まる2ヶ月前に書かれたことになる。しかし、マッカーシーイズムが本格化する以前であるとはいえ、当時のアメリカにおいて「リベラリズム」が「唯一の知的な伝統である」と断言する言葉は、トリリングの現実認識を語っているというより、「リベラリズム」に対する彼の過度の反感と、「保守的な衝動や反動的な衝動」に対する無関心——或いは無視——を露呈させているように見える。

実際、「トルーマン・ドクトリン」の発表以降に展開された反共主義の動きは、「保守的な衝動や反動的な衝動」といった簡単な言葉では要約できないような社会的現実を生み出していた。対外政策における「封じ込め政策」はもとより、国内政策においても反共主義は顕在化し、「トルーマン・ドクトリン」が発表されてから2週間もたたないうちに、「忠誠命令」(Loyalty Order)の異名を持つ「大統領命令9835」(Executive Order 9835) (1947年3月25日)が発令された。全ての連邦政府の職員を調査し、国家への「忠誠」(loyalty)が疑わしい者があれば解雇できることを定めた「大統領命令」だ

った。司法長官は「破壊的団体」(subversive organization)とみなされる団体のリストを作成して、それを公表した。そのリストには78の団体名が書かれ、その中には、アメリカ共産党だけでなく、「左翼の政治団体、平和グループ、救援組織、防衛委員会、労働者学校」(left-wing political parties, peace groups, relief organizations, diffense committees, and labor schools)が含まれていたという (Fariello 36)。連邦政府が始めた「忠誠宣言」の強制は、やがて州や市の職員に対しても行われるようになり、多くの職員が公職を追われている。<sup>2</sup> こうした動きに加え、1949年には、「スミス法」違反の廉で11人の共産党の指導者が有罪判決を受けるという事態も起こっている。トリリングが *The Liberal Imagination* に収めることになる批評を書いていた時期は、政治的リベラリストが「反動的」な動きによって封じ込められつつあった時代であった。

いっぽう、トリリングが *The Liberrall Imagination* を執筆していた時期は、アメリカの知識人による反共主義的文化戦略が進行していた時代でもあった。冷戦時代の文化戦争 (Cultural Cold War) である。

スターリン政権の下で30年代後半に行われた「大粛清」(Great Purge)と第二次大戦前の独ソ不可侵条約の締結 (1939年) は、アメリカの知識人、特にユダヤ系知識人の間に共産主義体制への懐疑と不審を生んでいた。だが、Norman Podhoretzも言うように、アメリカ社会の「商業文化」(business culture) に疎外感を覚えていた知識人の間では、アメリカ社会を芸術活動や文化活動に相応しい社会だとは見なさない者も少なからずいた。<sup>3</sup> どちらの体制が芸術・文化活動にとって望ましいのかという問題に関して、知識人の間では意見が分かっていたのである。

文化や芸術のあり方を巡るヘゲモニー争いは、1940年代後半から激化し、それはやがて、1950年の「文化的自由のための会議」(The Congress for Cultural Freedom)の設立という結果に至った。ソビエト寄りの知識人を集結して1949年に開催された「ウォルドーフ会議」(Waldorf Conference) から、1950年に反ソビエト寄りの知識人が参加して作られた「文化的自由のための会議」に至るまでの経過については、秋元秀紀の論文「冷戦初期のニュ

ーヨーク知識人」に詳述されているが、要するに、「文化的自由のための会議」の設立は、西側諸国の知識人、作家、芸術家、科学者の間で反共主義のイデオロギーが優位に立ったことを意味する出来事だった（秋元 23-43）。「文化的自由のための会議」はCIAとフォード財団から資金援助を受けながら、共産主義体制を自由な文化活動や知的営みを抑圧する体制だとして批判する活動を繰り返していった。その中には、『インカウンター』誌（*Encounter*）など反共主義のイデオロギーを流布する雑誌の出版、反共的な知識人や学者を集めての国際会議、反体制的なソビエト知識人の援助といった活動が含まれていた。「文化的自由のための会議」の設立を先導したのが、ユダヤ系知識人の代表であるSydney Hookであることを考えれば、トリリングは西洋知識人の間にあったこうした動きを熟知していたはずである。

### (3)

以上のような社会的・政治的・文化的文脈の中に *The Liberal Imagination* を置いてみると、「現在のアメリカにおいてはリベラリズムは、支配的な知的伝統であるだけでなく、唯一の知的伝統でさえある」（“In the United States at this time liberalism is not only the dominant but even the sole intellectual tradition”）という言葉が、いかに歴史の一面だけを強調しているかが分かるだろう。或いは、いかに＜敵＞の優位性を誇張しているかが分かるであろう。というのも、トリリングが「リベラリズム」を攻撃する時、その言葉の中には、後年彼自身認めているように、スターリン主義者を含む共産主義の同調者が含意されているからである。<sup>4</sup> 1940年代後半以降、共産主義の側に立つ政治的・文化的運動は、「支配的な知的伝統」であるどころか、実際は、政治と文化におけるヘゲモニー争いにおいて後退しつつあった。

しかし、このように言うと、あるいは次のような反論が返ってくるかもしれない。トリリングがリベラリズムを当時の「支配的な知的伝統」だというとき、それは、政治思想としてのリベラリズムではなく、文学批評におけるリベラリズムを指しているのではないか。つまりトリリングはこの評論集に

において文学論を展開しているのであり、だからこそ、彼は *The Liberal Imagination* を Parrington の *Main Currents in American Thought* に対する批判から始めたのではないかと。

トリリングがリベラリズム思想への批判を文学論の枠内で語っていることは確かである。しかし、Parrington の *Main Currents in American Thought* を「支配的な知的伝統」の典型的な例だとしてトリリングが批判するとき、40年代においては既に別の「知的伝統」、すなわち新批評が文学批評の流れを急速に変えつつあったという事実は巧みに隠されている。T. S. Eliot の編集による *The Criterion* が1922年に最初に刊行されたのに続き、Cleanth Brooks と Robert Penn Warren の編集による *Southern Review* が1935年に、John Crowe Ransom の *Kenyon Review* が1938年に、そして Allen Tate の *Sewanee Review* が1944年に、それぞれ刊行され始めている。Vincent B. Leitch が言うように、30年代から40年代にかけて新批評系の批評家の数は増え続けていた (Leitch 24)。それに反して、Parrington 流のアメリカ研究は40年代を生き延びることができなかつたのである (Dickstein 147)。<sup>5</sup> 実際、F. O. Matthiessen は、1949年に書いた “The Responsibilities of the Critic” の中で、新批評系のテキスト分析が文学研究を狭い専門分野にしてしまったことを嘆いている (Matthiessen 4-7)。ニューヨーク知識人と新批評系の批評家は、前者がトロッキズムを支持し、後者が農本主義を支持するというように、政治思想においては大きな違いがあったが、Leslie Fiedler も指摘しているように、「モダニズム文学」への傾倒という点で両者は共通する価値観を持っていた (Fiedler 59)。実際、トリリングの文学評論の幾つかは、*The Liberal Imagination* に収められているシャーウッド・アンダーソン論を始めとして *Kenyon Review* に掲載されたものである。こうした点を考慮に入れば、トリリングがParrington の影響力を過大視する次のような言葉もまた、〈敵〉の優位性を強調する言葉と見なすことができるだろう。

It is possible to say of V. L. Parrington that with his *Main Currents in American Thought* he has had an influence on our conception of American

culture which is not equated by that of any other writer of the last two decades. His ideas are now the accepted ones wherever the college course in American literature is given by a teacher who conceives himself to be opposed to the genteel and the academic and in alliance with the vigorous and the actual. (3)

#### (4)

では、実際にトリリングはどのような理由でリベラリズム批判をしているのだろうか。

先にトリリングが使う「リベラリズム」という言葉には、「スターリニズム」の意味が含意されていると書いたが、この本の中では「スターリニズム」という言葉自体は出てこない。それどころか、この評論集のキー・ワードであるはずの「リベラリズム」の定義も明示的には書かれていないのである。だが、このことが *The Liberal Imagination* が文学論であると同時に政治論になることを可能にする。明確な意味内容（シニフィエ）を欠いたまま使用される言葉は、政治への言及と文学への言及を両方可能にする言説を作り出しているからである。

たとえば、次のような言葉を読むとき、「リベラリズム」なる語は、政治的な意味を内包しているだけでなく、曖昧ではあるが、ある特定の知識人を示唆する用語として機能している。

In its political feeling our educated class is predominantly liberal. Attempts to define liberalism are not likely to meet with success—I mean only that our educated class has a ready if mild suspiciousness of the profit motive, a belief in progress, science, social legislation, planning, and international cooperation, perhaps especially where Russia is in question. (93)

ここで示される「リベラル」な知識人とは、利益優先社会に反対で、進歩主

義的歴史観を持ち、計画経済や法に基く規制を重視する考えを有し、特に親ロシア的な思想を持っている一群の知識人である。最後に「ロシア」の語が使われていることから、おそらく共産主義の同調者を示唆していることは明らかであろうが、それだけに留まるものではない。1930年代以降進められた「ニューディール政策」の支持者をこの「リベラル」な知識人の中にも含ませることも可能だし、Stephen Tannerがいうように、「合理主義者」や「啓蒙主義者」を意味しているとも考えることも可能である。要するに、ここで使われている「リベラル」なる語は、曖昧な意味内容を与えられながら、読者の心の中に、ある特定の思想傾向を持つ知識人を思い浮かばせることを可能にする。かくして、この「リベラル」な「教養階級」(educated class)は、漠然と左翼的ないしは進歩的知識人の全体を指す言葉として機能する。

そのいっぽうでトリリングは、こうした「リベラリスト」とは異なる「リベラリスト」の姿を提示する。タナーが指摘していることだが、トリリングの中には「良いリベラリズム」と「悪いリベラリズム」がある (Tanner 87)。トリリングは、“a criticism which has at heart the interests of liberalism might find its most useful work not in confirming liberalism in its sense of general rightness but rather in putting under some degree of pressure the liberal ideas and assumptions of the present time.” (“Preface”) と述べて、「今日のリベラリズム」の欠点を直すことで「良いリベラリズム」を創出することを主張する。

では、この「良いリベラリズム」の創出はどうすれば可能なのだろうか。これに対するトリリングの答えは極めて「美的」である。というのも、トリリングが「今日のリベラリズム」を問題にするとき、それを具体的な政治問題と結びつけるのではなく、文学の価値に関わる問題として扱っているからである。というよりも、トリリングにとっては、政治の問題とは常に文学の問題に包含されると言うほうが正確だろう。有体に言って、彼にとっての「リベラリズム」とは美学の問題に収斂する事柄であった。

The job of criticism would seem to be . . . to recall liberalism to its first



essential imagination of variousness and possibility, which implies the awareness of complexity and difficulty. To the carrying out of the job of criticizing the liberal imagination, literature has a unique relevance, not merely because so much of modern literature has explicitly directed itself upon politics, but more importantly because literature is the human activity that takes the fullest and most precise account of variousness, possibility, complexity, and difficulty. ("Preface")

ここでトリリングが述べている考えは、どちらかと言えば、ありふれた文学観である。人間の生活は多様性 (variousness)、可能性 (possibility)、複雑性 (complexity)、そして困難性 (difficulty) といった特質を持っており、こうした特質を最もよく表現してくれるのが文学 (特に小説) である。しかるに「今日のリベラル」な批評家は、複雑で多様な側面を持っている人間の内面性に目を向けず、抽象的な理念やユートピア的な未来像を機軸にして文学作品の価値を判断するという過ちを犯している。具体的にして個別的な人間の現実、理想論や抽象論では処理できない複雑かつ矛盾した人間の姿を描いた小説こそが価値のある作品である。これが、トリリングが「悪いリベラリズム」を批判する際に持ち出す理由の要諦であった。こうした考えは、「文化の中にある肯定と否定の両方を兼ね備えた」(contained both the yes and the no of their culture) アメリカの作家を十分評価できなかったという理由でパリントンを批判する言葉の中に典型的に見出すことができる(9)。或いは「理念と思想が能天気合致しているために、忍耐強く思想を検証することができない」(ideals consort happily with reality and they urge us to deal patiently with ideas) ような批評家を批判する言葉の中にも現れている(20)。「悪いリベラリズム」を「単純」「抽象」「理念」「進歩」「一般性」といった概念と結び付けて批判し、「良いリベラリズム」を「複雑」「多様」「矛盾」「個別性」「具体性」といった概念と結び付けて擁護するというのが、トリリングの価値判断の根幹をなしている。そして、改めて繰り返せば、こうした判断は文学の価値に関する彼の考えから出ているのである。

トリリングは、*The Liberal Imagination*の主張は「今日のリベラリズム」の弱さの克服につながると考えていた。しかしながら、自らの美的価値を基準にして、文学作品のみならず、政治イデオロギーの是非を判断することは、政治の問題を文学の問題に回収することでもある。トリリングにとっての〈敵〉は、歴史的現実を剥奪されたまま、「単純」「抽象」「理念」「進歩」「一般性」という、それこそ抽象的な概念に結び付けられて批判の台座に乗せられる。その批判の仕方は、多様な内実を持つ思想と運動をPCという言葉で表象し、それを「全体主義」や「抑圧」といった概念と結びつけるPC批判を思い起こさせる。

たしかに、トリリングは文学批評から政治を排除すべきではないと考えていた。しかしながら、*The Liberal Imagination*に対する彼自身のコメントを読むとき、トリリングのいう「政治」とは、普通使われている「政治」とはまったく異なる概念であることが分かるだろう。

The opposition I offered to it [the old ethos of liberal enlightenment] was of the simplest kind, consisting of not much more than my saying to people who prided themselves on being liberals that liberalism was 1) a political position and 2) a political position that affirmed the value of individual existence in all its variousness, complexity, and difficulty, and that, since this was so, literature had a bearing upon political conduct because literature, especially the novel, is the human activity that takes the fullest and most precise account of variousness, complexity, difficulty—and possibility. (*The Last Decade* 141)

「個人の存在の価値を、その多様性、複雑性、困難性において肯定する政治的立場」(a political position that affirmed the value of the individual existence in all its variousness, complexity, and difficulty)。これがトリリングの考える「政治的立場」だとすれば、それは現状の生活を肯定する政治学であり、結局のところ、政治への関心を文学批評のモチーフから排除すること

につながるであろう。Morris Dicksteinの言葉を借りれば、「美学への退行」(aesthetic retreat) (Dickstein 354) となるのである。

この意味で*The Liberal Imagination*の中でトリリングがフロイト心理学への強い関心を既に示していることは示唆的である。特に、彼の関心が“id”と“ego”と“super-ego”の間の緊張関係のドラマに向けられ、その緊張関係の中で強められる“ego”の機能を重視していることは興味深い。フロイト心理学はトリリングには人間の複雑さと矛盾を科学的に説明してくれる学問として魅力的に映っていた。そして、さらに言えば、心理学の視点から社会と歴史と文学を解釈するフロイトの方法は、マルクス主義的歴史観を捨て去るための絶好の解釈装置に見えたにちがいない。この後年のフロイト主義者は、既に40年代に歴史からの逃避先を心理学の中に見出していたと言えるだろう。

こうして見てくると、*The Liberal Imagination*という本の表題は、皮肉なタイトルのように見えてくる。トリリングは当初この本のタイトルを“Liberalism and Culture”とする考えを持っていた。しかし、最終的に、“liberal”という言葉は名詞としての独立性を失い、“imagination”という名詞を修飾する形容詞として生き残ることになる。この表題には、自分が望ましいと考える「リベラルな想像力」のあり方を世に問う意味が込められていたはずである。しかるに、「リベラル」という語は、それが本来持っていた政治的意味を奪われ、「イマジネーション」という名詞を飾る地位に置かれる。「イマジネーション」の主権の前で、「リベラリズム」は単なる記号としてその主権に従属することになるのである。

## 注

1. Griffin Farielloによれば、「トルーマン・ドクトリン」を公にした1947年3月12日の演説は、当初の草案では「資金投入の提案」(investment

prospectus)、つまり、ギリシャとトルコに対する財政援助を議会に訴える内容になっていたが、それでは議会と国民の理解を得ることができないので、「共産主義」対「民主主義」という対立の図式を「主なテーマ」として強調することになったという。(Fariello 35)

2. 例えば、ロサンゼルス市は、1948年に「忠誠宣言」を市の職員に義務付ける法令 (Ordinance No. 94004) を発令し、「忠誠」を誓うことを拒んだり宣誓供述書に署名をしなかった18名の職員が解雇されている。また、ニューヨーク市では1948年にALPの支持者150人以上が公職から追放されている。こうした動きは、50年代が進むにつれていっそう拍車がかかっていった。(Caute 341-45)

3. ポドレッツはアメリカの知識人が革命後のソビエトに引き付けられた理由について、次のように述べている。 “. . . one of the main reasons why so many intellectuals were attracted to Communism in the first place was their belief that in a Communist society people like them—educated people, cultivated people—would be better off than they felt themselves to be under capitalism. In America, for instance, everything was, or seemed to be, run by businessmen. Intellectuals had no status, no power, no money. At worst they were ridiculed and sometimes harassed; at best they were tolerated and ignored.” (Podhoretz 8)

4. 40年代の文化的・政治的状況についてトリリングは次のように述べている。 “At our distance in time the significance of this situation [a political-cultural situation in the 40s] is perhaps not easily recalled. I speak of the commitment that a large segment of the intelligentsia of the West gave to the degraded version of Marxism known as Stalinism. No one, of course, called himself a Stalinist; it was the pejorative designation used by those members of the class of advanced intellectuals who were its opponents. (*The Last Decade* 140)

5. デイックスタインはパリントンの*Main Currents in American Thought*の急速な影響力の低下について次のように語っている。“Such a ponderous approach [Parrington’s approach], though welcomed by sociological critics and economic determinists in the thirties, could not survive the decline of radical politics after 1940 and the ascendancy of new forms of aesthetic analysis. (Dickstein 347)

### 参考文献

Caute, David. *The Great Fear: The Anti-Communist Purge under Truman and Eisenhower*. New York: Simon and Schuster, 1978.

Dickstein, Morris. “The Critic and Society, 1900-1950.” Litz, 322-76.

Fiedler, Leslie. *What Was Literature? Class Culture and Mass Society*. New York: Touchstone, 1982.

Fariello, Griffin. *Red Scare: Memories of the American Inquisition: An Oral History*. New York: W·W·Norton, 1995.

Leitch Vincent B. *American Literary Criticism from the Thirties to the Eighties*. New York: Cambridge UP, 1988.

Litz, A. Walton, Louis Menard, and Lawrence Rainey, eds. *The Cambridge History of Literary Criticism* (Vol. VII). Cambridge: Cambridge UP, 2000.

Matthissen, F. O. *The Responsibilities of the Critic*. New York: Oxford UP, 1952.

Podhoretz, Norman. *Breaking Ranks: A Political Memoir*. New York: Harper & Row, 1979.

Tanner, Stephen L. *Lionel Trilling*. Boston: Twayne Publishers, 1988.

Teres, Harvey. “Lionel Trilling.” Litz, 423-38.

Trilling, Lionel. *The Liberal Imagination: Essays on Literature and Society*.

New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1978.

---. *The Last Decade: Essays and Reviews, 1965-75*. New York: Harcourt  
Brace Jovanovich, 1979.

秋元秀紀. 「冷戦初期のニューヨーク知識人」 山下昇編『冷戦とアメリカ文  
学』(世界思潮社、2001).

齋藤博次. 「PC戦争— “speech codes” の問題を中心にして」 岩手大学人文  
社会学部地域文化基礎研究講座『人間・文化・社会』(1997).